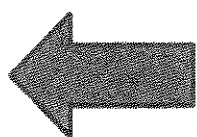


国語 訂正

2ページ 2行目

誤

構えであることに気づいた。



正

構えであることに気づいた。

アフリカの赤道直下、^(注)ヴィルンガ火山群の山地林でマウンテンゴリラの観察を始めて間もないころのことだ。私がゴリラから数メートルの距離を置いて観察していると、近くを通りかかったシリィという若いオスのゴリラがちらっと私の方を見て近寄ってきた。¹これはまずい、と私は思った。

それまで野生ニホンザルの調査をしてきた私は、サルに近づかれたらサルのルールに従って行動せよ、という^①テツソクを守ってきた。ニホンザルの社会では、相手を見つめるのは強いサルの特権である。弱いサルは強いサルに見つめられたら、決して見返してはいけない。目を合わすと挑戦^{ちようせん}したと受け取られ、強いサルから攻撃^{こうげき}されることになるからだ。目をそらすか、歯をむき出して笑ったような表情を浮かべ、自分が逆らうつもりがないことを表明しなければならぬ。そこに相手と競合するような食物があればなおさらのこと、決して食物に手をのばしてはいけない。だいたいサルが近づいてくるというのは、私の周りにサルの関心を引くものがあるからだし、そのサルは自分の方が私より強いと感じているはずなので、刺激^{しげき}しないようにそっと目を伏せておく方が^②ブナンである。

だから、ゴリラのシリィが近づいてきたときも、私はシリィの方を見ないように目を伏せた。ところが、シリィは一メートル前で止まって、じっと私の顔をのぞきこんだのである。若いオスとはいえ、一〇〇キログラムを優に超える巨漢である。グローブのような手をしているし、長くて鋭い犬歯^{すさば}が光る。つかまれて咬^かまれてもしたら重傷を負いかねない。私は逆らうつもりがないことを示すため、さらに横を向いた。すると、シリィは私が向けた方へと顔を寄せ、さらに私の顔を正面からじっと見つめたのである。顔と顔の距離はわずか二〇センチほどしかない。私は恐怖^{きようふ}に駆^かられて目を伏せてじっとしていた。意外なことに、シリィはしばらく私の顔をのぞきこむと、低い声でうなり、二、三歩遠ざかると、ぼこぼここと両手で力強く胸を打っては足早に遠ざかって行ったのである。

しばし呆然^{ぼうぜん}としりィを見送った私は、ひよっとしたら、シリィの行動を私が誤解したのではないかと思った。ニホンザルと同じことだと思っていたが、ゴリラが顔をのぞきこむのは違^{ちが}う意味があるのかもしれない。そこで、私はゴリラどうしの行動をもっと注意深く観察してみることにした。すると、これまでただ近くによるだけで何もしていないと思っていた行動が、実は重要な機能を果たしていることに気づいた。ゴリラどうしが近づきあつて顔を合やす。でもニホンザルやチンパンジーのように体に触れることもないし、抱き合ったり、相手に馬乗りになったりすることもないので、私は何か意味のある交渉をしたとは見なしてこなかった。ところが、それは、ゴリラのあいさつ、遊びの誘い^{さそ}、求愛、仲直り、けんかの仲裁などに用いられていたのである。顔を合わせても、どちらかがニホンザルのような歯をむき出す笑いを浮かべることはない。どちらも無表情のまま、一分近くも至近距離でじっと顔を合わせるのだ。何

とも不思議で静かな社会交渉に見えた。

そのうち、私はこれが²ゴリラの社会性を表す^③テンケイ的な構えであることに気づいた。ニホンザルは常に自分と相手のどちらが強いかを認識し、確かめながら暮らしている。群れで仲間といっしょに移動すれば、食物や休み場所、交尾の相手をめぐって仲間と競合が生じる。それを防ぐために、^a優劣関係を作り、弱い立場のサルが自分の行動を抑制^{そくせい}するように^④チョウセツしているのだ。ところが、ゴリラはサルのような優劣関係を認識していない。ゴリラのオスはメスの二倍近い体重を持つ。子どものゴリラの二倍以上もある。でも、どんなに体の差があつても、小さいゴリラは劣位な態度を取らない。体の大きなゴリラが近づいてきて顔をのぞきこんでも、視線をそらすことなく、相手の顔を^b見返す。自分が食べようとしていた食物を横取りされたら、ゴツゴツと不満の声を出す。決して負けていないのである。

ゴリラには、ドラミングという両手の平で交互に胸をたたく動作が見られる。これは長い間、ゴリラの^Aと見なされ、ゴリラの凶暴性^{きようぼうせい}を示す態度と考えられてきた。野生のゴリラの行動が群れの中で観察されるようになって、^cドラミングが戦いの合図ではないことが分かるようになったのである。ドラミングはオスの専売特許ではない。音は小さいが、メスも子供も胸をたたく。それは、遊びの合図だったり、好奇心や興奮だったり、不満の表明だったり、自己主張だったりする。特定の相手に向けられないことも多い。

私が驚いたのは、背中の白い大きなオスどうしが近づきあつてけんかが起こりそうになったとき、まだ若いシリィがするするとオスたちの間に割り込んでけんかを止めたことだ。このときもシリィは二頭のオスにかわるがわる近づいてその顔をのぞきこみ、互いを遠ざけることに成功した。ニホンザルでは決してこのような仲裁は起こりえない。体の小さなサルが大きなサル同士のけんかに介入したら、すぐさま攻撃されて仲裁どころではなくてしまうからだ。ゴリラでそれが可能なのは、体の大きさに応じて優劣が決まっていないうこと、勝敗をつけることがトラブルの解決とされていらないからである。ぶつかり合おうとしたオスたちはどちらも負けようとは思っていない。だから実際に組み合えば、どちらもけがなしには終わらない。誰かが割って入ってくれば、けんかをせずにどちらもともメシツを失わずに引き分けることができる。そこで、自分たちよりも体の小さい仲裁者に従うのである。

つまり、群れ生活に平和と秩序^{ちつじょ}をもたらすルールがニホンザルとゴリラとは違うのだ。ニホンザルは互いに優劣を認知し、勝ち負けをすぐに決めてトラブルを防ぐ。ゴリラは勝ち負けを決めずに、第三者が仲裁に入ることによって対等性を維持する。メシツを保つためには、仲裁者は小さいほうがいいし、もし大きなゴリラが仲裁に入ったら、力づくで止められたということになり、メシツが保てなくなるからだ。相手をのぞきこむ行動もドラミングも、こういった、ゴリラの対等性を維持するために発達したに違いない。

こうしたニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、人間はサルではなく、ゴリラに近い社会性を持っているように見える。子どものころから人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメンツを保とうとする傾向が強いからだ。しかし、人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではない。相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている。ただ、そこには慎重な気配りが働いている。勝つことによって、実は自分が不利な状況に置かれることが多いからである。

ニホンザルのように、勝つことは相手を屈服させ、抑制させ、押しのけることを結果する。勝者と敗者は対等ではなく、勝者が利益を独り占めにする。だから、勝つても勝者は敗者と友達にはならない。でも、負けないでいようとすることは相手と対等な立場が目標なので、相手を屈服させたり押しのけたりすることにはならない。友達を失わないし、**d** 仲良くなれるかもしれないが、常にトラブルが起る危険が生じる。そのため、間を取り持つてくれる別の仲間が必要なのである。人間はこういったことにいつも最大限の注意を払いながら暮らしている。勝ちたいけれど友達は失いたくないから、勝利を誇らず、しきりに敗者に気配りをする。サルのように利益を独占せず、みんなに気前よく分配する。ゴリラのように、自分より弱い仲裁者であっても言うことを聞いてメンツを保つ。人間は互いに対等であることに常に気を配りながら社会を作ってきたように思える。

しかし、現代の社会は効率性を重視するあまり、勝敗をつけることでトラブルを解決する傾向を強めているように見える。それは、「負けまいとする態度」を「勝とうとする気持ち」に読み替えることによって加速している。サルとゴリラのように、この二つははっきりと違う社会性を作り出す。それを混同して同じものと見なすことによって、日本は競争社会を乗り切ろうとしている。鈍感な親たちは、負けたくないと思う子どもたちを見て、「勝ちたい」と思っていると誤解し、尻を叩いて勝たそうとする。その結果、**e** 孤獨になつていく。ねたまれ、うらまれ、疎んじられていじめにあい、孤立していく。

そんな事態を深刻化させる前に防ぐには、もう一度人間の社会の由来を考え直してほしい。人間はニホンザルではなく、ゴリラと共通の祖先から**B** をより重んじる社会を受け継いできた。それは、互いに静かに向き合う交渉を持つことによって保たれてきた。人間らしい社会を作る上で、顔と顔を合わせ、互いの暖かい関係を確かめ合うことはとても重要なコミュニケーションなのである。IT技術は私たちに、遠く離れていても会話や情報交換ができる機会を与えてくれた。しかし、それは人間の対等な社会性を保持してくれる力を持っていない。人間が争わず、勝敗にこだわらず、対等で平等な関係を保つためには、互いに顔を合わせる機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計することが不可欠なのである。それは勝つ構えより、**4** 負けない構えの美しさを尊ぶ社会いいだろうと思う。

(山極 壽一「負けない構えの美しさをゴリラから学ぶ」による)

【語注】

(注1) ヴィルンガ火山群

ルワンダ、コンゴ民主共和国、ウガンダ国境地域に位置する火山群。

問一 部①「テツソク」②「ブナン」③「テンケイ」④「チョウセツ」⑤「フホニ」のカタカナを漢字に直しなさい。かい書で丁寧に書くこと。

問二 **a** **e** に当てはまる語として最もふさわしいものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア かえって イ じつと ウ あらかじめ エ しだいに オ やつと

問三 部1「これはまずい、と私は思った」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マウンテンゴリラの観察を始めて間もないころのことで、ゴリラをよく知らなかったから。

イ これまでに野生ニホンザルの調査をしていたので、サルのルールをよく知っていたから。

ウ 一〇〇キログラムを超える巨漢のシリーが作者の目前で止まって、じつと顔をのぞきこんだから。

エ サルの社会では、目を合やすことは挑戦と受け取られ、攻撃されることになると思ったから。

オ サルが近づいてくるというのは、私の周りにサルの関心を引くものがあるはずだから。

問四 部2「ゴリラの社会性」とありますが、それにあてはまるものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分と相手のどちらが強いかを常に認識し、確かめながら暮らしている。

イ 効率性を重視し、勝敗をつけることでトラブルを解決する。

ウ トラブルが起きた時に、勝敗をつけることが解決方法とされていない。

エ 自分たちよりも体の小さい仲裁者に従い、どちらとも体面を失わずに引き分ける。

オ あらかじめ優劣関係を作っておくことで、仲間と競合が生じるのを防いでいる。

カ 勝者と敗者は対等ではなく、勝者が利益を独り占めにする関係。

問五 **A** には「争いを始めることを相手に対して伝える」という意味の四字熟語が入ります。あてはまるふさわしい四字熟語を自分で考えて答えなさい。

問六 **部3** 「ニホンザルとゴリラの社会性」とありますが、「ニホンザル」の社会性とはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が食べようとしていた食物を横取りされたら、はつきりと不満の声を出す。

イ 勝利を手にした者は仲間を失うことになり、しだいに孤独になっていく。

ウ 勝ち負けをはつきりにつけないで、どこまでも対等性にこだわる。

エ 勝ちたいけれど仲間を失いたくないから、独り占めせずに、敗者を気づかう。

オ 体の小さな者が大きな者同士のけんかの仲裁をすると、かえって攻撃されてしまう。

問七 **B** にあてはまる三字の語を本文中から抜き出して答えなさい。

問八 **部4** 「負けない構えの美しさを尊ぶ社会」とありますが、それはどのような人間社会のことですか。その内容を八十字以内で説明しなさい。

問題は次のページに続きます。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

三日間、よくしゃべる人と一緒にいて、¹疲れ果てた。そういう人には勝手にしゃべらせてばやんとしていればいいのという人もいるが、そうは行かない。やはり一緒にいる以上、それも三日ばかりのことなら、^a相槌を打ち、気持ちこそこねるようなことはしたくなかった。

私がちよつと余計な話をしたのだから、そこから彼には新しい計画が生まれ、私も暇に任せていろいろ意見を出したため、その話
はどこまでふくれていくのか際限のない有様だった。

私だつて以前は新しく思いついたことに熱中した日があつて、同人雑誌をはじめて出す時や、自分たちの叢書が実現しかけた時などは、早朝から深夜まで方々を駆け廻り、そうすることによって一層情熱を掻き立てたものだが、今はもうそんな風に^b有頂天になるようなことはない。そのために、他人の熱っぽさが疲れさせるのだった。

そこには両側の山がかなり近くまで迫った谷間の宿で、前には溪流が賑やかな音を立てていた。梅雨明けの間際の雨が激しい降り方で、水量は普段よりは大幅増し、それにつれて水音も高くなっていた。

一緒だった人は三日以上はどうしても駄目で帰っていったのだが、雨がまた強くなりだした午後、バスの終点までの一時間ばかりの道を、レインコートに鳥打帽子、ズボンの裾を靴下の中へ入れた格好で宿の玄関を出て行った。雨が上がつていたら送りがてらそのあたりを帰りに歩こうかと思っていたが、それもやめて部屋に戻ると、本当に静かで、川音と雨の音とが、わずかに障子を開けて置いた部屋を早速占領した。

どつと疲れが出たという感じで、ともかく一時間ばかり午睡をして見ようと思ひ、部屋の隅に積んだままになっていた蒲団を敷いて横になったが、慣れない午睡など、そう簡単に出来るはずもなく、それに一人になれた嬉しさで、此処へ来てから一行も書かなかった日記など書きはじめて夕方になった。

*

^{注4}河鹿が鳴き出した。二日前にもその声を聞き、おしゃべりの途中であつたが河鹿だよと私は彼に教えた。するとそうかいとひとことと言っただけでそのいい声に耳を傾けようともせずししゃべり続けるので、その時から私も少々^A出したようだった。河鹿はその後、まるで彼のその態度に腹を立てたように鳴かなくなってしまったが、彼が帰ったのが分かったかのようにまた美声を聞かせはじめた。

私は日記の後に書くつもりでいた手紙は夜にまわして、声を聞きに外へ出て見ることにした。^{注5}帳場の脇の机で手習いをしていた娘が、私の姿を見ると半紙を裏返して、どこへ行くんですかと尋ねた。河鹿がよく鳴くからそばに行つてしばらく聞こうかと思つて。

もうそろそろ河鹿の声も終わりでさうである。天気が上がると、それでもう来年までお別れだなどと、その娘は年寄りじみた言い方をした。それじゃあ、あの今鳴いているのは奥さんを見つけないかと言つて出て行った。父さんの長靴を出ししうかと後ろから大声が聞こえたが、それはありがたいけれども、わざわざ引返して借りるのも変でそのまま自分の短靴で流れの近くまで行つた。

以前、一メートルばかりの滝の、しぶきのかかる岩にしがみついて鳴いているのを幾度か見たが、こちらの^C足もとがおぼつかない上に視力が弱くなって正体は容易に見届けられない。情けない話だがこの頃は左右の聴力も不均衡な衰え方をしているので、音の方向に自信がなくなっている。

あんまりまごまごしているのは²みつともないので、その辺りにただぼんやり立つて声だけ聞いていることにしよう。そう思つた時に、あたりは急に明るくなり、あんなに激しく降っていた雨もやんでしまった。傘をすぼめると薄陽が照りはじめ、青空が方々に見えていた。それは夏の青空だった。

その爽快な空の色と、その前を引揚げて行く雲のせわしない流れにしばらく見とれてみると、いつか気がつかないうちに河鹿も鳴き止んでいた。帳場にいた娘がさつき言つた通りになった。もちろんその言葉を疑つてなんぞはいなかったが、あんまりびつたりと言つた通りになつたので、これは宿に戻ると、得意になつてどんなことを言うだろうかと考えて見た。

やがて空は赤く染まり、染まり切らないうちに暮れて行つた。そして星が出て穏やかな夜が訪れた。

決めてあつたように便箋を出して手紙を書き始めた。河鹿の声が聞かれなくなったのは物足りない気もしたが、^Bた気分の手紙を書くのにはふさわしい晩だった。数行を一気に書いてそろそろ調子が整つてきた時に、これは何のための手紙なのだろうかと思ひ出して、万年筆に蓋をかぶせて考えた。

自分がそれを望みながら滅多にもえなくなつた手紙を、人も同じように待ち望んでいると勝手に決めて書いているが、それを受取る人は私の願ひ通りには読んでくれないかも知れない。そんなことを先に考えたら、すべての人との繋がりは切れてしまう。私が自分を置いていた状態はまさにそれである。願ひ通りに読んでもらえないのはいちとして、煩わしいものが舞い込んで来たように溜息をもらして封を切り、便箋に細かく五枚も六枚も書いてあるのを見て^Cてしまうかも知れない。その人は、心の片隅でというよりは堂々と、返事を強要しているとさえ思ふかも知れない。

そんな³ 悲しいことが確かにある。努力をして返事を書けば、また嬉し^{うれ}がって寄こす。こういう哀れな関係が手紙によって相手から生じる。

私は数行書いた便箋を破る。私の空想は間違いでなさそうだった時、返事を強要出来ない手紙を書くことに考えを切りかえたのだった。それは死者への手紙である。

私のことを、あいつは遠慮^{えんりょ}深いから黙^{だま}っていれば訪ねては来ないだろう。面と向かって話をするのが怖^{こわ}いので、それでひと晩もふた晩もかかって手紙を書くのだろう。そう言ってくれた人になら、死んでからも^Dて手紙が書ける。

頬杖^{ほおづえ}を突いた電燈の下へ蛾^がが来て舞う。便箋を片付けて日記帳を開け、そこへ下書きのつもりで⁴死者へ手紙を書いて行^いった。

*

翌日、谷を下って行^いった。川の合流点へ来てから別の谷へと入^いって行^いった。そこには溪流^{けいりゅう}というようなものはなく、手を大きくひろげたようなところが多く、水も淀^{よど}みがちであった。それは地図で想像していたよりも明るく静かで、庭園のような眺めが随所に見られた。それはまた整い過ぎていて、眺めにつられて^Eていると窮屈^{きうくつ}になって来るので、岸辺の岩に靴^{くつ}を脱^ぬぎ、素足^{すあし}になって、滑^{すべ}りそうもない岩を探しては無理をしないように飛び移^{うつ}て行^いった。表面が磨^{みが}かれた庭石のようなものが多かった。

その岩の一つに、水蠶^{（注）やこ}が這^はっていた。それを見つけたまでは、飛び移る時に滑らない用心ばかりをしていたが、注意してみると水蠶は方々の岩に這^はっていた。そして遂^{つい}に蜻蛉^{とんぼ}の羽化^{うか}にめぐり合^あった。生まれ出たばかりの蜻蛉は指先で触^ふれてもまだ飛び立^たつ

^Xはないが、伸^のばした新しい翅^{はね}には既に夏の大気を縦横に切^きって行^いく^Yがみなぎっていた。

昨日の夕方から今日にかけて、さまざまの生物が入れ替^かわった。私はこの有様も死者に告げようと思^{おも}ったが、それが単^{ただ}に⁵地上の報告に終わらせないためには、自分の、こうした生命を見た際の思考の微動^{びどう}が如何にも頼^{たよ}りなく思^{おも}われた。

(串田 孫一の文章による)

【語注】

- (注1) 叢書 …… 同じ種類・分野の事柄を、一定の形式に従って編集・刊行した一連の書物。
(注2) 鳥打帽子 …… 短いひさしのついた平たい帽子。
(注3) 午睡 …… 昼寝^{ひるね}をすること。
(注4) 河鹿 …… 谷川の岩間にすむカエル。雄^{おす}の鳴き声が美しい。
(注5) 帳場 …… 旅館や商店などで、帳簿付けや勘定^{かんじょう}などをする所。

(注6) 手習い …… 文字の読み書きを習うこと。勉強^{べんきやう}やけいこのこと。

(注7) 水蠶 …… トンボ類の幼虫^{つうしやう}の通称^{とくしめ}。特殊なものを除いて水中にすむ。

問一

部a～cの語句の本文中の意味としてふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「相槌を打ち」

- ア 相手の話に調子を合わせて、受け答える
イ 自分の意見がある程度抑^{おさ}えて、受け答える
ウ お互^{たが}いの意見を聞き入れながら、受け答える
エ 相手の気持ちを尊重して、肯定^{こうてい}の返事^{へんじ}だけする
オ 自分の主張を通すために、肯定否定を明示する

b 「有頂天になる」

- ア 物事に夢中になる
イ 得意になって失敗する
ウ 調子に乗ってうぬぼれる
エ 忙^{いそが}しく周囲が見えなくなる
オ 世に出ようと出世意欲をもつ

c 「足もとがおぼつかない」

- ア 疲れて足がこれ以上動かない
イ 靴が今の状況に適していない
ウ 足腰に力が入らずよろめいている
エ 自分の立つ場所がはっきり見えない
オ 立っている地面の状態が不安定である

問二

^A～^Eに当てはまる語として最もふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただ

し、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア 安心し イ がっかりし ウ とりすまし エ ゆっくりし オ うんざりし

問三 — 部1「疲れ果てた」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア よくしゃべる人の気持ち^{きもち}を損^こねないように、余計なことを言わないように三日間ずっと気を張り続けていたから。
イ よくしゃべる人の話ばかりを三日間も一方的に聞かされ続け、最後まで自分の意見を聞いてもらえなかったから。
ウ よくしゃべる人の新しいことに取り組む情熱^{じやうねつ}に対して、何も熱中しなかった自分が三日間も向き合っていたから。
エ よくしゃべる人との議論の中で、忘れかけていた何かに熱中する気持ちが思い出され、三日間集中していたから。
オ よくしゃべる人が自然の豊かな静かな旅館で河鹿の美しい声に気づかないくらい大きな声で話し続けていたから。

問四 — 部2「みつともない」とありますが、筆者は自分のどのような姿をどのように思ったのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 滝の近くに正体のわからない何かがいると思って、恐怖で動けない姿。
イ 年をとって衰^{おとろ}えてしまったため、河鹿に近づくことができないでいる姿。
ウ 河鹿すらも見つけられないような、都会暮らしに慣れ切っただらしない姿。
エ 雨が降りしきる中に、老人ともいえるいい大人が河鹿を探す子供じみた姿。
オ 長靴を貸すという娘の親切な申し出を断つたのに、短靴で滝に近づけない姿。

問五 — 部3「悲しいこと」とありますが、どういう状況が「悲しいこと」のですか。八十字以内で説明しなさい。

問六 — 部4「死者へ手紙を書いて行つた」とありますが、筆者がそうしたのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 死者なら自分のわがままな言動を、嫌^{いや}でも受け入れてくれると思ったから。
イ 生きている人間との人間関係がわずらわしく、誰ともつきあいたくなかったから。
ウ 自分を理解し、受け入れてくれる人と、いつまでも繋^{つな}がっていたかったから。
エ 返事^{こたへ}が欲しいわけではなく、自分の思いをだまっていた聞いてくれたらよかったから。
オ 自分の手紙で他人に迷惑^{めいわく}をかけないように、手紙を書いた気分を味わいたかったから。

問七 — ☒ X と ☐ Y にあてはまる言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア X	危機感	Y	展望
イ X	機会	Y	可能性
ウ X	能力	Y	宿命
エ X	意志	Y	力
オ X	可能性	Y	方向性

問八 — 部5「地上の報告に終わらせない」とありますが、このとき筆者が思いをめぐらせていることの説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生きのびようとする生き物たちの姿に、その生き物だけでなく人間である自分の生きる意味にもつなげたいということ。
イ 季節の移り変わりをその場限りの変化としての出来事ではなく、すべての命が次の命へとつながり続けているということ。
ウ 地上に生きる人間との関係性が断^たれた今、地上の生き物だけでなく死後の世界に自分の安息の地を求めたいということ。
エ 河鹿や水蠶^{みづぐ}が変化したことだけでなく、梅雨が終わり夏が来たという季節の移り変わりにまで視点を広げたいということ。
オ この旅で出会った河鹿や水蠶^{みづぐ}だけでなく、自分や死者までもふくめて大きな自然の中ですべてが生かされているということ。

問九 この本文の題名として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生命の微動
イ 季節の移ろい
ウ 交替する営み
エ 取り戻せぬ自然
オ 流れゆく星々

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(i) 次の文章は八つの段落で構成されています。段落AとBの間には三つ、BとCの間には二つの段落が入ります。あとのア～オの段落を正しく並べかえ、文章を完成させなさい。

A 社会をつくる生き物たちは、みな「群れ」ています。社会性を持つ生き物以外にも「群れ」をつくる生物は数多くいます。しかし、いったい「群れ」とはなんでしょう。例えば、あなたの家の庭に近所のネコが3匹いたらそれは「群れ」なのでしょうか？

□ □ □

B 一般的な直感でいってもそうなのですから、まして、科学がそういうものを群れとして定義しないと、個体がどのように相互作用することで群れが保たれているとか、群れ同士の相互作用とかを研究対象にすることができません。科学で定義する「群れ」においては、ある広さのエリアの中にどれだけの個体がいるかではなく、個体間にどのような相互作用があり、どのような場合に群れとしてふるまうのかということが重要になります。

□ □

C 一言でまとめれば、生き物の「群れ」とは「集団全体がなんらかの機能をもつ、互いに相互作用のある複数の生物個体の集まり」と定義できるでしょう。

(長谷川 英祐「働かないアリに意義がある」による)

ア われわれがある生き物の集団を群れだと思うかどうかは、狭い空間に複数の個体がいるからという根拠によるのではなく、その個体の集まりに、全体として群れるなんらかの意味があるかどうかにかかっています。

イ 先に出した「庭にネコが3匹いる」という状況を考えてみます。このネコたちが、お互いの存在にも気づいておらず、互いになんの関係ももたず庭という範囲に存在しているだけとしたら、誰もがそれは群れではないと思うでしょう。しかし、その3匹

が、お互いの位置を把握はさしていて、獲物である1匹のネズミを追いつめるためにお互いの位置を調整しているとしたら、これは群れだと思うでしょう。

ウ また、複数の個体が集まっていれば群れと呼べるわけではないことは、池のなかの石の上でひなたぼっこしているカメラたちを考えてみればわかります。確かに、池のなかの石の上にはたくさんのカメたちがひしめき合っていますが、彼らは個別に日に当たっているだけで、集団全体としてなんらかの機能を果たしているわけではありません。このような場合、いくら個体の密度が高くて、群れとしての意味を考えると自体が無意味です。

エ このような「群れ」とはいったい何か？ というような概念概念の定義にかかわる問題は「定義論」と呼ばれ、科学においては定義の意味がハッキリしていれば、研究のなかでその定義自体に疑問を呈てい示することに意味はないとされています。生物というものを、群れの観点から見ると何が見えてくるかの議論を意味のあるものにするため、生き物がどのような状態にあるとき「群れ」と呼ぶべきなのか、という話をまじりました。

オ 空間的な広さが問題ではない例として、ゾウの群れがあります。ゾウは少数の個体のいくつかの集まりが広い空間に散在（注3）していますが、人間の耳には聞こえない低周波で発信しており、互いの位置を把握はさし、緊急時には集合して子供の防衛などの機能を果たす「群れ」としてふるまいます。

【語注】

(注1) 定義 …… 物事の意味・内容を他と区別できるように、言葉で明確に限定すること。

(注2) 概念 …… 物事のひとまとまりの意味内容。

(注3) 散在 …… あちこちに散らばってあること。

(注4) 低周波 …… 波動や振動の振動数が小さいこと。または周波数の小さい音波、電波や交流を指す。

(ii) 次の文章は七つの段落で構成されています。段落AとBの間には五つの段落が入ります。あとのア～オの段落を正しく並べかえ、文章を完成させなさい。

A 影はたしかに暗い存在である。しかし、そのもつ逆説的な性質をもつとも端的に示すものとして、トリックスターがある。トリックスターとは、世界中の神話や伝説の中で活躍する一種のいたずらもので、わが国の民話に登場する「吉ちよむ」とか「彦一」などがその例である。次にそのような話を一つ示すことにしよう。

□ □ □ □ □

B トリックスターは影のもつ逆説性を如実に示すものである。その存在は現存する組織をおびやかすものではあるが、それは常に新しい思いがけない結合を呼びおこし、既存の組織のもつ単層性に対して、多くの可能性を示唆し、その重層性を明らかにする。

(河合 隼雄「無意識の構造」による)

A トリックスターはこのように、策略にとみ、変幻自在であり、破壊と建設の両面を有している。アフリカの神話に活躍するトリックスターが案外、創造神話と結びついたりするものこのためで、破壊によって古いものが崩れ、そこに思いがけない結びつきが生じることによって、新しい創造が成立するのである。

I トリックスターの存在はどのようなところにもいるものである。敵対するグループの両方に属していて、片方の秘密を片方に流したりするので、大騒ぎが起こったりするが、そのような騒ぎを通じて案外、二つのグループが仲良くなったりするときもある。トリックスターは二つの世界の中間地帯を跳びまわり、そこに波乱を巻きおこす。失敗したときは人騒がせないたずら者であり、成功したときは新しい統合をもたらす英雄となるのである。

ウ この話はトリックスターの特性をなかなかよく描き出している。殿さまをだます策略のうまさ、計画をすぐに実行する行動力、そして仏法僧がククククと鳴くと思っていたとほけてみせる変化の自在性などにそれが表されている。

E あるとき、大作さんが、山で仏法僧の鳴くのが聞こえると言いつらした。殿さまが仏法僧の声を聞きたいということで、山まで立派な道をつくり、やって来たが、ククククという声ばかりで仏法僧の声がしない。大作を呼び出して尋ねると、仏法僧がククククと鳴いていると言った。そこで、それは山鳩ではないかとえらく叱られたが、おかげで立派な山道ができたということである。

オ 下手をすれば打首にでもなりそうな危険を犯して、最後は山道の建設ということをもたらす創造性も、そのもつとも高い機能としてあげておかねばならない。大作の力によって、町と山とを結ぶ道ができるのは、ひいては殿さまと民衆とを結びつけることにもなる。中心部と周辺部を結びつける役割を担っているともいうことができる。

【語注】

- | | | | |
|------|---------|---|--|
| (注1) | 逆説 | … | 一見、真理にそむいているようにみえて、実は一面の真理を言い表している表現。 |
| (注2) | 如実に | … | ありのまま。正確に。 |
| (注3) | 既存 | … | すでに存在すること。 |
| (注4) | 仏法僧 | … | 美しい青緑色の渡り鳥で、日本には初夏に飛来し秋に去る。名の由来は鳴声で、この鳥が「ブッポーソー」と鳴くとされていた。 |
| (注5) | 山鳩 | … | 山にすむ野生のハト。キジバト・アオバトなど。 |
| (注6) | 打首 | … | 罪人の首を刀できり落とす刑罰。 |
| (注7) | 中心部と周辺部 | … | ここでは中心部としての「町」と周辺部としての「山」を指す。 |

名

